

ベストピア  
**Bestopia**

「パリ通信 19号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十五年七月  
第十九号

< 2013年7月 >

古賀 順子

平松礼二 睡蓮の池

7月14日パリ祭前夜、今晚はフランス各地で花火が上がります。シャンゼリゼ通りの軍事パレードを明日に控え、パリの空をテスト飛行する戦闘機やヘリの爆音が聞こえてきます。長い夏のバカンスがスタートしたフランス、ようやく夏空を取り戻した各地で夏のイベントが始まりました。私は、眩い緑とセーヌの豊かな水の流れを見ながら、ジヴェルニーにある印象派美術館「平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ」展(7/13-10/31開催)へ行きました。

「モネの『睡蓮』の大作をオランジュリ美術館で初めて見たのは、1994年のことでした。大きな衝撃を受けました。これらの画布を縦に折り曲げれば屏風になると思いました。いったい何に駆り立てられて、モネは、絵のモチーフとして、池を、睡蓮をこれほど大きな画布に描いたのか、考えてみました。そして、答えを見つけるために、ジヴェルニーに行くことにしたのです」。平松画伯は述べています。それから20年間、何度もジヴェルニーの睡蓮の池を訪れました。その言葉通り、睡蓮は屏風絵となり、モネの睡蓮とはまったく異なる美しい日本画の世界を創りだしています。睡蓮の池を飛び雨蛙、とんぼ、蝶、そして鳥たち。柳に吹く風、池に散る桜の花びら。平松画伯の睡蓮は、日本画の伝統、日本人の伝統に他なりません。「日本画の絵は、外で描くことはできません。そのため、屏風をアトリエの床に寝かせて、板の上に乗って描きました。まずは、日本画の「色」の基礎である墨で、濃淡をつけながら、柳と睡蓮の輪郭を描き、その後、鮮やかさの異なる岩絵具を重ね塗りしていったのです。池の上の光の効果を表現するために、とくに、金を選びました。そのあと、第二の実験を試みました。テーマは睡蓮の装飾的な姿で、これをさらに輝かせたいと思ったのです。単色の緑をやめて、そこに白金や銀、青銅などの金属泊、真珠母、赤貝の粉末など、日本の伝統の色である天然の素材を加えました。すると、画面全体が装飾的になり、中世の作品に近づいてくることに気づいたのです」。支持体の準備に始まり、何層にも色を重ねて塗る、一層一層が乾く時間は考える時間、日本画の技術と鉱物顔料による美しい感性の世界です。

平松礼二画伯と印象派美術館を結んだのが、小山ブリジット氏です。30年ほど前から日本で暮らし、武蔵大学教授として、比較文学、美術史を教えています。日本を愛し、日本文化に関する多数の著作を日本語とフランス語の両言語で出版しています。平松画伯とは15年来的交友関係で、睡蓮の連作過程を見守ってきました。モネへのオマージュとして、睡蓮の池があるジヴェルニーに作品を残したいと願う画伯は、今回の展覧作品をすべて印象派美術館に寄贈されます。油絵とはまったく異なる日本画の伝統を、もっと西洋の人々に知ってもらいたいという画伯の想いに、小山ブリジット氏は深い感謝の意を表し、熱い感動を語っています。

パリから車でも列車でも1時間半ほどのジヴェルニー。狭い道を1本挟んで向かい合うモネの家と印象派美術館。金箔の上に描かれた睡蓮の池に散った、輝く胡粉の白い桜の花びら、日本画は美しいとつくづく思いました。ヴェルニサージュが終わり、21時を過ぎてパリに戻るとき、大きな夕焼けの太陽が、セーヌ河に赤く映っていました。平松画伯の睡蓮を脳裏に残したまま戻る道のりは、幻想的な美の世界に包まれた幸せな時間でした。